

論文

## 「同一化」の行方

——ショタの受動性をめぐって——

彭 信 文\*

## はじめに

今日のショタ作品—キャラクターやジャンルとしての「ショタ」から区別し、ショタを表現するもの、本研究ではより限定的にショタに関する性描写を含む作品を指す—には、おにショタ、おねショタ、モブショタなどのサブジャンルがあり、互いに影響しあいながらそれぞれの持つ特徴がより洗練された形で、変化し続けている。

ショタに関する代表的な論点として、受容者がショタに「同一化」することによって規範性から逸脱することができるという見解（渡辺 1998; 堀 2009）、ショタ作品を恋愛イデオロギーやジェンダーロールから逸脱する場として捉える論点（吉本 2014）がある。また、ショタ作品が表現するショタ同士の性関係へ同一化することによって、オートエロティシズム的な欲望を実現するという指摘（永山 2006=2014）、ショタへの同一化を受容者の愛されたい欲望として、課せられた「ヘゲモニー的な男性性から逃れる」ことができると捉える視点（長池 2019）も挙げられる。いずれも受容者がショタに同一化し、ショタの属性—かわいい・弱い・受動的—を引き受けることによって受容者が置かれているポジションや課せられた規範性を変容させる可能性があるとする示唆する論点である。本研究では、以上のような先行研究が指摘してきたことをショタによる「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」と定式化し、そこに存在する問題点を指摘した上で、受容者／ショタ／「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」三者の間に構成されている力学的な関係をなぞる。

第一章では、ショタの歴史、ショタの先行研究を精査した上で、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」「同一化」などの概念に存在する不明瞭さを改めて指摘する。第二章では、先行研究が取り扱ってきたショタの商業マンガ作品（以下、ショタ作品）を分析し、先行研究が指摘した「視線」と「記号」による同一化を「能動的同一化」と位置づけ、それに対する「受動的同一化」がどのように発生したかを論じる。こうした能動性から受動性の転換に関する議論は、精神分析理論において、とりわけフロイトの「子供が叩かれる」（1919）など自我に関する論考で多く論じられてきた。第三章では、第二章の分析によって見出された「受動的同一化」と「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」との関係性を精神分析理論の検討を踏まえて、ショタと関わり合う際に存在する「受動性」を考察する。

以上の考案を踏まえて、本稿は、ショタの受容において存在する「能動的同一化」と「受動的同一化」の関係性を明らかにした上で、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」を経由しない、より根源的な受動性の側面がいかにショタの受容に影響するかを照射することを目的とする。

## 1 マンガ研究圏内におけるショタの言説——規範性と同一化の問題をめぐって

本章では、ショタの歴史をたどり、先行研究における受容者のショタへの「同一化」による「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」という言説を確認した上で、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」の限界を論じる。

---

キーワード：ショタ、同一化、マンガ研究、精神分析、受動性

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2020年度入学 表象領域

## 1.1 ショタ史の概説

ショタという言葉は、1980年代に幼い男の子を愛好する女性を指す言葉「ショウタロー・コンプレックス（ショタコン）」が語源である。ショタの定義に関して、一般的な理解としては、『大辞林』の「ショタコン」条目に「俗に、性愛の対象を少年に求める心理。あるいは、性愛の対象として少年を取り扱う作品（マンガ、イラストなど）や、その心理を抱く人（女性）のこと。ショタ」（松村編 2008）と書かれている。またピクシブ百科事典には「ショタとは、かわいい男の子（キャラクター）の事である」（pixiv：2024）と記され、「可愛い外見の少年キャラクター」という共通の認識を確認することができる。

それに対して専門的な理解は以下の通りである。渡辺由美子は1998年の『ショタ研究』において、「ショタの定義はショタファンの数だけある」にもかかわらず、それでも「顔のラインは丸くてもシャープでも良いが、面長の大人顔ではないこと／自分が憧れる〈可愛らしい〉部分を持っていること」（渡辺 1998: 39）と述べた。吉本たいまつ『ショタアンソロジーを考える。1994-1999』では、「半ズボンが似合う10歳前後の少年もいるが、ハイティーンと思われるキャラや、高校生もいる」とし、年齢は「12歳を中心に、10～14歳」、見た目は「パイパン。「ショタは無毛」は鉄の掟」、性に対する態度は「奔放に性を楽しむ」、そして半数以上の作品では「半ズボン・ショートパンツ」を着用、という主な特徴が挙げられている（吉本 2014: 32）。永山薫は「萌え要素に分解すればショタ的図像は、童顔萌え、小柄萌え、貧乳萌え、おちんちん萌えと言うことになる」（永山 2003: 57）と述べ、ショタ作品が男性向けエロマンガ（成人コミック）の文脈において、ショタをある特定の記号の組み合わせとして認識することが可能だと指摘した。

ショタ作品の歴史に関して、先行研究では80年代後半に『キャプテン翼』（1981-）のアニメ化と共にブーム化したBLの二次創作活動「やおい」から、一つのサブジャンルとして顕在化してきたものという共通な認識がある（渡辺 1998; 吉本 2014）。その後、渡辺や吉本が考察した通り、1988年のオリジナルアニメ作品に登場した人気の少年の主人公たちはショタ表現の土壌となり、「ショタ」は一つのジャンルとして定着していき、90年代には「ショタブーム」と呼ばれる全盛期を迎えるようになった（渡辺 1998; 吉本 2014）。特筆すべきは、1994年の『赤ずきんチャチャ』（1994-1995）などのアニメ作品をきっかけとして男性ファンが流入し、本来女性向けのやおい・BLで萌芽したショタは、男性受容層によっても支えられるようになった流れがある（渡辺 1998: 37）。これも、今日にも観察できるような、ショタが男性向けジャンルとして認識されている背景となっている。

しかし90年代の「ショタブーム」は長くは続かなかった。1999年に施行された「児童ポルノ法」の影響により、『好色少年のスズメ』（2002-2008）などの成人向けの商業誌のショタ表現は衰退した。その後、性器の修正、表紙の成人指定マークの追加を要請する表現規制を引き受けながら、ゼロ年代において男の子のかわいさと女装で象徴する女の子のかわいさを融合させた「男の娘—かわいい女の子に見える男性キャラクター—とともにショタが再発見され、今日においても一定数の受容層が存在している（吉本 2015）。

## 1.2 主要なショタの先行研究の確認

ショタの解釈に関しては、受容者への影響が先行研究の主な着目点である。以下では、各言説を概観した上で、その射程を検討する。

渡辺は、男女の意識の差に着目し、両者はともにショタの「弱さ」から、既存の性別規範から脱却する意味があるということ述べた。渡辺によると、腐女子などの女性の受容層は、「きれいで弱くて可愛い男の子」（渡辺 1998: 48）であるショタに対して自分が能動的な「攻め」—BLにおける能動的に振る舞う人物—に同一化することによって、女性が社会において引き受ける「受け身」から自由になることができる（渡辺 1998: 47-48）。男性にとっては、男性自身を「〈可愛い〉、〈弱い〉」と思っはいけないという男性に課される規範性から自由になる意味を持っており、性差によって受容にも差異が見られる（渡辺 1998: 53）。また、受容者にとってショタが「自己同一化の対象でもあり」、「彼らがショタを通して欲しているのは、過去の自分が追い求めていた〈理想の少年像〉なのかもしれない」と結論づけたように（渡辺 1998: 53）、「自己投影」が重要なショタを読む一つの仕方だと示唆した。

吉本は、性差によるジャンル分けという「男女別学」（吉本 2014: 32-33）を無化する「場」として、ショタアンソロジーの意義を見出した。吉本による、BLを愛好する男性＝腐男子研究は、ショタ作品を含め、BLの二次元にお

ける男性同士の性愛表現が、腐男子にとってバブル期に形成された恋愛イデオロギー、ジェンダーロールから逸脱する場であることを論じた（吉本 2009、2014）。

他方で永山は、ショタをいくつかの「萌え要素」に還元することができると指摘し（永山 2003: 57）、男性によるショタ作品の読みに対して「可愛さ」とそれに付随する自己の理想との関係に着目した。男性読者がショタを欲望する方法は、「自分が可愛い男の子になりかわり、可愛い男の子同士でエッチなことをする」（永山 2003: 53）という自分の理想を他者に仮託し同一化することである（永山 2006=2014: 295）。言い換えると、ショタという存在が「非マッチョ男子」の身体表象の一つだとし、ショタ表現のサブカテゴリーである「ショタ同士」の性関係を「ワタシとワタシのセックス」（永山 2006=2014: 295）と位置づけ、ショタ作品のオートエロティシズムの側面を強調する論点が提示されていた。

そして、精神分析の枠組みでショタの受容の状況を解釈する長池一美の研究を確認する。長池は、香港、韓国など東アジアの腐男子のインタビュー調査を踏まえ、「ショタへの愛着」を二つの方向性で説明した。第一に、フロイトの論考「子供が叩かれる」（1919）を参照し、ショタという「無垢な男の子」が顕わす『『男性の尊厳の一部を奪われた』自身を想像し』また、「少年への回帰に対する願望、そして自己の女性化させる欲望と結びついている」と述べ、「ヘゲモニー的な男性性から逃れるための」表現としてショタの意義を論じた（長池 2019: 89）。第二に、異性愛腐男子が「投影」を通して表現されたショタへの愛着を持つ意義である。長池は、『『投影』の行為は一方に限定されない多様性を内包している』と述べ、「ショタへの愛着は現実的な子供への欲望ではなく、自己愛を促す媒介として機能」することを強調した。さらに「ショタへの愛着は、ショタを愛することと、ショタとして愛されることの両方に対する願望の多様性」であると示唆した（長池 2019: 94-95）。

以上で概観したように、ショタに関する先行研究は基本的に、ショタへの「同一化」を重要視している。「ヘゲモニー的な男性性」からの逃避という意義を重視する長池の論点は代表的なものであろう。「ヘゲモニー的な男性性」は先行研究において厳密に定義されておらず、その使用の文脈からすると、主に男性が性行為などさまざまな場面において能動的に振る舞うべきという規範性として理解できる。

だが、実際に受容者がどのようにショタへ「同一化」し、どのように自分に課せられた規範性から逃れるかに関して、先行研究では多く語られていない。したがって以下では、マンガ研究における二つの同一化—視線による同一化と記号による同一化—に関する言説を概観した上で、「同一化によるヘゲモニー的な男性性からの逃避」に存在する構造的な矛盾を明らかにする。

### 1.3 二つの同一化——視線と記号

#### (i). 視線による同一化

「視線」はマンガ研究において同一化を語る際に欠かせない要素である。同一化は主に「視線」や「視点」のコントロールによって表現されてきた。たとえば竹内オサムが指摘した「視点」の意義（竹内 2005）や、伊藤剛が述べた「リアリティ」を維持するための「コマ」の構造（伊藤 2005）など、多くの議論がされている。「同一化技法」に関する議論（竹内 1999）、または伊藤が行った「コマ」の構造の分析が示したように、マンガ研究において「同一化」は、対象をどのように「見る」か、またどのように「見られている」かの視線の問題にもなる。

堀あきこは『欲望のコード』において、上述した「視線」をより限定的に「読者の視線」と規定し、「コマの中で最も大きく描かれる人物を読者は見つめる」とした（堀 2009:150）。堀は、「男性向けポルノコミック」において「男性キャラの不可視化」などの技法によって男性読者の身体を漫画表象まで延長させる「視線」が機能するのに対し（堀 2009:170）、女性による「レディコミ」などのコンテンツへの同一化は、「内面モノローグ」などの方法で機能している（堀 2009:177）と指摘した。前節において確認したように、ショタは広義の BL から派生した一つのジャンルであり、とくにショタ作品が男性同士の性行為をも描写する点から、ショタ作品の関係性を BL の枠組みで解釈されることは多くなる。こうした議論に関して、堀が女性による BL の読みで発生する「ヤオイの視線」をさらに細分化し、一致する視線とを「俯瞰する視線」と区別し議論を展開する箇所を確認したい。一致する視線というのは、BL が描かれている「受け」—BL における受動的に振る舞う人物—や「攻め」の身体や性的快楽への「共感」である。これは主に表現されたイメージという想像的な側面に対する同一化として位置付けることができる。対して「俯瞰

する視線」というのは、「攻め」「受け」を「どちらも見る」ことによって、「恋愛成就」またはその後の生活像を楽しむ視線である（堀 2009:184）。これは、基本的に関係性という象徴的な側面に対する同一化の働きとして捉えることができる。また、以上の「ヤオイの視線」は堀の議論において、男性読者が「男性向けポルノコミック」に対して抱いている「フェティッシュな欲望」—「男性身体の透明化」によって男性キャラクターを排除し、好みの「記号」の集合体である女性に対して「一対一の関係」を構成する「視線」—から厳密に区別したという前提で展開している点にも注意しなければならない（堀 2009:171）。

ところで、以上の視線による同一化を成立させるには、もう一つの条件が必要だ。それは時間によって一連の視線の動きを保証するという、すなわち伊藤が述べた「時間的連続性」（伊藤 2007）である。実際、マンガの性表現の分析においてBLにおいては受けや攻め、もしくは第三者や俯瞰の視点といった視線による同一化も、この「時間的連続性」によって保障されている（堀 2009:150; 守 2010:188-189）。伊藤はマンガの「痛み」の表現を知覚する際に、「時間的連続性」と感情移入／同一化との関係を明確に述べた。本来、一枚の絵だけでは感情移入が難しいが、複数の絵によって「時間的連続性を喚起させ」、それによって感情移入が可能になるという（伊藤 2007:113）。ここで伊藤が念頭においているのは、従来マンガにおいて表現されてきた怪我や痛みにある「記号絵」的な側面（大塚 1997:18-19）に対して、単に記号の組み合わせだけでは解釈しきれないマンガへの感覚である。「記号絵」という枠組みで理解されているマンガでは、描かれた身体が記号であるが故に、ケガをしても次のコマでキャラクターがすぐさま全快することも可能である。同時に受容者はケガが意味する痛みや傷を感じることは不可能だ。伊藤は絵（コマ）の間の連続性を重視し、そこにあったのは記号の集合としての身体であっても、コマとコマの間に存在する「時間的な連続」がある限り、そこには「内面」の存在もありうるし、その内面に「感情移入」や「同一化」することも可能だと指摘している。

#### (ii). 記号による同一化

以上の点を踏まえても、マンガに存在する「記号的」側面はやはり完全に否定することができない。とりわけショタ作品に関しては、既に言及したように永山が「萌え要素」（永山 2003: 57）としてショタを捉えたことに注意しなければならない。「萌え要素」というのは、東浩紀が規定したような、「消費者の萌えを効率よく刺激するために発達した」記号である（東 2001:67）。記号というの、前述した怪我や痛みという「意味」を直接的に示すものであり、ショタ（作品）では「童顔」「小柄」（永山 2003: 57）などといった、かわいさを象徴する要素である。「自分が可愛い男の子になりかわる」（永山 2003: 53）というの、ショタを構成するさまざまな記号を「自分の理想」の要素として捉え、それによって組み立てられた「かわいい」理想＝記号で指示された意味を自分と一致させることとして理解することができる。このように、見る／見られる視線による同一化の手前にある、直接的に画面内の「意味」にアクセスする記号的な同一化は、視線による同一化とは区別されるもう一つの同一化であると言えるだろう。

#### 1.4 「ヘゲモニー的男性性からの逃避」が孕む両義的な状況

視線による同一化は、主に一連の時間の継起によって保証された、視線を発する主体と受容者である「私」と作中の人物との間に等価的な関係を見出すことによって同一化を成立させる。それに対して記号による同一化は、「時間的連続性」と関係なく、受容者が対象のある特徴を一つの自己の記号＝理想として我が物にすることによって、受容者と同一的な関係が結び付けられる。ショタによる「ヘゲモニー的男性性からの逃避」は、前者において、ショタが表す受動性と受容者との一致によって可能になる。後者では、ショタの受動性が一つの記号として受容者に仮託されることによって実現される。だが、「ヘゲモニー的男性性からの逃避」という枠組みそれ自体には、本来ヘゲモニー的男性性を無化するという目標と矛盾する側面がある。それは、ショタを通して「ヘゲモニー的男性性からの逃避」を実現しようとする際に、ヘゲモニー的男性性から逃避する際の対象を必要としているからである。

「ヘゲモニー的男性性からの逃避」というのは、ヘゲモニー的な男性性の対立概念であるショタの「可愛く弱い」「性関係における受動性」に同一化することによって抑圧から逃れることである。だが、上述のように、同一化の対象であるショタの「可愛く弱い」「性関係における受動性」は、逃避つまり否認の対象として、「非-ヘゲモニー的男性性」としてしか認識することができない。なぜなら、受容者による視線／記号による同一化は両方とも「ショタと受容者」

という関係において展開されたものであり、それ以前の「作品と受容者」の関係、つまり作品に対する受容者の能動性と受動性が検討されてこなかったからだと考えられる。

シヨタの受動性を対象として捉える同一化は、基本的にあらかじめ確立されたソリッドな主体＝受容者を前提としている。シヨタ作品は受容者＝読み手である主体の解釈に応じて意味が変化する客体にもなりえる。だが、そのような主体は言うまでもなく自明的ではない。そこで本稿では、視線／記号による同一化という能動的に作品に介入する同一化を、「能動的同一化」とし、それに対して作品それ自体に対する受動性つまり「受動的同一化」の存在を措定する。「受動的同一化」は、シヨタの性行為や関係性における受動性から区別された、シヨタやシヨタ作品それ自体に対する同一化の受動性に関するシヨタ作品の読み方である。

ところで、同一化の能動性と受動性に関して、詳細は第三章に委ねるが、精神分析の欲動理論では、幼児の性の発生として多く論じられてきた。幼児は自己保存のために、自己の外部にある自己保存の妨害になるものに対する攻撃性がある。しかし、攻撃性の対象は常に存在するというわけではない。対象が一旦失われると、攻撃性は空回りし、次第に攻撃性が自分に向くようになり、攻撃性を表す様々な動きそれ自体が目標になる。これをシヨタに関する「能動的同一化」と「受動的同一化」に対応させると、視線／記号による「能動的同一化」は、まさにシヨタ（作品）に対する攻撃性に関わるものだと考えられる。他方で「受動的同一化」は、シヨタ（作品）を経、反転された受容者自己自身に対する攻撃性に関わっていると考えられる。

だが、以上で述べたものは、あくまで図式的な対応であり、このような能動性から受動性の転換に関して、実際の作品分析および精神分析の読解が必要である。次章ではまず、シヨタの商業誌作品を分析し、「ヘゲモニー的男性性からの逃避」が生じた能動性と受動性の両義的な状況を、「能動的同一化」と「受動的同一化」という対立を通して明らかにしていく。

## 2 シヨタ作品を読む——二つの同一化が交差する身体をめぐる

第一節で述べたように、今日において、シヨタは「シヨタ+男の娘」という形で受容されている傾向がある。実際にシヨタ作品の分析に関して、吉本のような、シヨタアンソロジー全体の関係性と表現の内容—世界観、服装、オーガズムのタイミング、挿入描写の有無など—に着目しているものもあれば、永山のような、主に数点の単行本のシヨタ作品が表現している身体、関係性の傾向を論じているものもある。だが、一点の作品を緻密に分析し、議論を展開しているものは、管見の限り存在しない。したがって本章では、第一章で検討した「ヘゲモニー的男性性からの逃避」が孕む両義的な状況を意識し作品分析を行う。以下では、ゼロ年代以降の「男の娘」と融合した形で展開されているシヨタの商業誌の流れに合わせ、男の娘のみならず、シヨタを主題とする作品も多数掲載しているシヨタ商業誌『オトコのコ HEAVEN』50巻（メディアックス編 2020）の、巻頭に掲載されているイラストを取り上げる。

この作品のジャンルは「男の娘」であるため、女子制服のスカート、髪型、女物の下着などの記号的な要素が強調される。また、イラストという形態をとるこの作品は、複数のコマによって構成されたマンガ作品と違い、世界観やシチュエーションはナラティブによって説明されるわけではなく、ただ一枚の絵にあらゆる要素を詰め込む形で表現されるところも特筆すべき点だと言える。ただし、イラストとはいえ、吹き出しや擬音語などマンガ的な表現も採用されている点から考えると、この作品はフルカラーの「1コマ」マンガ作品として位置づけることができよう。以下ではまず、視線／理想による同一化という「能動的同一化」の視点から作品を分析する。

### 2.1 視線／記号による「能動的同一化」の分析

この作品の中には、服装、髪型、セリフ、痙攣しているシヨタの性器などの要素によって構成された主要なキャラクター（以下、シヨタ）がある。シヨタが開脚し、挿入され快感に溺れている様子が描かれている。このように画面の全体を占めるシヨタの姿を見る受容者の視線がある。よって、この受容者の視線が、「同一化」の仕方により、描かれている性行為の場面にどう参加するかが左右される。挿入する側が下に配置され、うつむいて対象であるシヨタを見る。挿入しているところ、挿入する匿名的な人物（以下、モブキャラ）の性器、挿入されているシヨタの性器、結合部が強調される。画面外からやってくるモブキャラの手など、モブキャラの存在感を最小限に抑えつつ、対象

であるショタと性行為をするのに必要な器官や身体の一部が画面内に配置されることは、視線による同一化を機能するための仕掛けとも言えよう。

他方で、ショタが「こちら」に差し向ける視線もある。この視線によって、画面外からやってきた手、下半身の局部ないしペニスは、モブキャラに属しているものとして保証されている。また、セリフの「先輩」というショタの呼びかけによって、上述した視線の効果がさらに強化されている。この意味においてモブキャラという「こちら側」の存在は、ショタの「能動的」視線や呼びかけに基づいている。

ここで言うショタの呼びかけはセリフとして成り立っている。受容者は書かれたセリフを「見る」ことによって、その呼びかけを受け取ることが可能になる。言い換えると、ここでは、見る／見られる視線以上に、第三者として作品全体を俯瞰する視線がある。俯瞰する視線による全体情報の把握なしには、見る／見られる視線との一致を経て、同一化することはできない。同じ視線のやり取りにおいて、読者がなぜ「ショタを犯す側」ではなく「犯される側」を選択し同一化に移行するかは、この作品全体の記号群を把握するための俯瞰する視線から理解しないと、そもそも語ることは不可能だ。したがって、作品に対して「最初に」投げかけられたのは、この作品の全体情報を把握する俯瞰的な視線である。この俯瞰的な視線による作品の把握は、まさに「能動的」である。

記号による同一化はこの作品において、スカート、女物のパンツと、「男の子」として成り立つショタの性器である「ショタペニス」という記号の組み合わせによって構成された「女装」という意義の関係性に対するものである。これらは、基本的に先述したような、作品全体を把握する俯瞰的な視線に基づいている。だが、いうまでもなく単純な記号という解釈だけでは説明することができない様々な要素も描かれている。例えば肉体と液体といったように、記号ではない多くの情報がこの作品において描き込まれている。

## 2.2 「受動的同一化」による作品の読解

ショタペニスが画面の中央の下に配置されている。一枚のイラストであるため、勃起、射精というシークエンスはもちろん表現できない。その代わりに、勢いよく射精することなく、ただ我慢して漏らした精液がペニスの先端から溢れ出ている様子によって、ショタが快感を感じているところが表現されている。他方で、ショタのペニスより倍以上の長さや太さのモブキャラのペニスがあり、ショタの体内に挿入されている。その逞しさを表現するための、血管が怒張している様子も伺える。

液体は、この作品において豊富な情報をもっている。先述のようなショタペニスの先端から溢れ出ている白い液体に対して、結合部から溢れている白い液体、乳首から漏れている白い液体、モブキャラの陰毛付近に勢いよく迸る白や透明な液体、そしてショタの太ももあたりに垂れている透明な液体など、様々な種類の液体が配置されることが確認できる。液体の色や配置される場所によって、その都度精液や腸液、もしくは汗として解釈される。このように液体は、作品の演出において重要な役割を担っている。

以上では、衣装、性器、体液など、描かれた「物質」を概観した。だが、フルカラーの「1コマ」であるこのイラスト作品には、いわゆるマンガ表現においてよく使われる要素も多く存在している。それが、夏目房之介が「マンガ表現論」において「音喩」「形喩」と定式化したような（夏目 1995）、身体の周辺に付け加えられる「ビクッ」「はーッ」などの擬音（擬態）語、吹き出し、動きを表現する効果線である。これらの「物質ではない」要素も、同一化の対象として成り立っている。白く縁取りされた黒い字で描かれている「ビクッ」は、ショタが痙攣する様子を表し、紫色の字の「はーッ」や「ヒッ」がショタの喘ぎ声を表す。ピンクのギザギザした吹き出しに囲まれたセリフは、同じくピンクの文字で爆発した表現の吹き出しによって囲まれた「ぐぼッ」「プピッ」は結合部の周辺に配置され、挿入し激しく動く様子を強調する擬音語と区別され描かれている。また、身体の周辺に書かれている白い点線やギザギザ状の線などの効果線がある。ショタの太ももや膝付近にある白い線は、「ビクッ」と同じくショタの痙攣する様子を表すものである。対してモブキャラの手付近やペニス付近の数本並べられる線は、激しく上下もしくは水平に動く様子を表現するものとして捉えられるだろう。もちろん、以上で取り上げた要素以外にも、涙、太ももの肉付き、手の骨格、耳の形、髪色ないし肌色などの身体の一部が、性的な興奮を喚起する記号とは関係ない部分であっても同一化の対象として成立する場合もある。

以上で分析したように、女装や大きな目、女物のパンツの「わかりやすい」記号とは違い、身体の表面に配置さ

れた液体と衣装の組み合わせ、あるいはそれらと「ビクッ」の形や色、吹き出しの形とセリフの内容の組み合わせによって喚起された感覚も存在している。この感覚は、もはや「萌え要素」だけでは説明できない。そこに記号的な側面が働いていることは否定できないが、これらの要素はあらかじめ想定された「萌え」という特定の見え方に応じて存在するものではない。そうではなく、記号による同一化が示す「能動的」な読みから区別し、受容者である読者—具体的に作品を読む、あらかじめ存在している主体—は、むしろそのような描かれたものに「読まれて見られる」ことによって「興奮する身体」として発見される。つまり、先行研究が示した視線／記号による「能動的同一化」の観点は、「作品内部」の人物の見る／見られる水準に留まっており、絵そのものの「物質性」、そして受容者の「身体性」が抜け落ちていた。だが、身体の見出しにより、受容者が作品を読むという関係性が反転する。受容者は作品の物質性、作品に見られることに晒され、線分や色彩によって触発された非意味的な「身体」として現れてくる。これは、本節の作品分析によって析出した「作品に対する受動性」の側面であり、特定の作中人物になるという「能動的同一化」とは異なる「受動的同一化」である。

### 2.3 「能動的同一化」を行う主体と「受動的同一化」を引き受ける身体

先行研究が示した「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」という受動性は、むしろ常に作品に対する「能動性」に基づいたものである。それは第一章で述べたように、視線による同一化では、基本的にあるソリッドな主体が先行し、それによる「作品を見る行為」を通して作品で描かれた視線を選択し同一化するという能動的な介入になる。記号による同一化も同じように、作品内に存在する記号に対する能動的な反応である。「能動的同一化」が示したのは、このような作品に先行する主体による読みである。だが本章の第二節の分析が示したように、作品そのものの視線に晒されることによる、ショタ作品に対する「受動的同一化」の側面も存在している。この受動的同一化では、作品を読む「主体」が記号にならない様々な物質によって瓦解され、したがってショタと関係しているのは、物質によって触発された、ある非人称的とも呼ばれる「身体」である。では、この「身体」は具体的に「主体」とどう区別されているのか。

「受動的同一化」において、作品中に特徴的な記号ではないもの、すなわち物質に同一化する／同一化される場所がある以上、「ヘゲモニー的な男性性」と全く関係ない読みも十分に想定しうる。この場合はショタ作品の意味が無化され、意味から、「物質＝身体」への移行が発生する。身体は主体ではない。身体は発見されたものであり、視線を引き受けるものである。この作品を女装したショタが屈強な男に犯されると捉える段階では、ただの意味のやりとりであり、身体とは無関係な読み方である。そうではなく、視線／記号による同一化においては、先に検討した通り作品の「意味」への働きかけであり、ショタ作品を「可愛く弱い」「性関係における受動性」を表現するものとして把握することができる主体が必要とされている。だがすでに分析したように、ショタ作品には「可愛く弱い」「性関係における受動性」を表すショタだけが描かれているのではない。ピンクの文字で描かれた爆発状の吹き出しと進む白い液体、パンツの主線（輪郭線）やペニスの血管など、描かれた物質というものの組み合わせによって表現された強度があり、それらが揺さぶりをかけたのは、意味を把握する主体以前に存在する身体である。この場合では、同一化はむしろ受容者＝読者から作品に対する働きかけではなく、作品の向こうからやってきた呼びかけであり、主体を排除し身体を発見するプロセスとして理解することができる。つまり、視線／記号による同一化から区別するこの「受動的同一化」は、つねに「作品がする／作品にされる」という形で表され、主体なき同一化として、もはや「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」というショタ作品の持つ意味から離れて機能している。

このように、「受動的同一化」は「能動的同一化」が発生する前の、より根源的な受動性に関わる読み方である。第一章の末尾で予告したように、このような能動性と受動性との区別、そして能動性から受動性への転換は精神分析において、主に自己保存と性をめぐる欲動として論じられてきた。次章で詳しく論じるが、「能動的同一化」は、まさに物質という非意味的な側面が溢れているショタ（作品）を自己保存の障害として捉える際に、非意味的な側面によって引き起こした不快を「可愛く弱い」「性関係における受動性」と解釈することによって抹消するという攻撃性の表現である。他方で「受動的同一化」では、攻撃性はショタ（作品）の非意味的な側面による刺激に晒された自己に向けるようになり、自己自身を性的に興奮させるものになる。言い換えると、「能動的同一化」の段階では、まだショタ（作品）と性が結びつけられておらず、「受動的同一化」になって初めて、ショタ（作品）によって引き

起こされた刺激を性的に捉えることができるようになる。フロイトの「子供が叩かれる」およびそれに連関する精神分析理論の展開は、まさにこのような謎めいた方向転換と人間の性の発生に関する考察である。

次章では、以上のショタ作品において見出した能動的な同一化から受動的な同一化への転換を、「子供が叩かれる」を中心に展開されている精神分析理論とどう対応しているのかを考察する。

### 3 精神分析における「受動性」——性的な興奮の発見を辿って

「能動的同一化」では、ショタが表している「受動性」を引き受けることによって規範性を否認する主体を獲得する。「受動的同一化」では、作品それ自体の「能動性」を肯定し、作品によって強制され、絵=物質が表す強度を引き受ける身体が発見される。ここでは、二つの意味で「能動性/受動性」が区別されている。一つは、ヘゲモニー的な男性性が要求する能動的な振る舞いや、性行為においてリードされ、受動的に振る舞うことなど、性質や属性に関わる能動/受動の区別である。もう一つは、「ヘゲモニー的な男性性/受容者」「ショタ作品（ショタ/受容者）」においての主語と述語の間に発生する力学的な関係の能動/受動の区別である。ショタ作品を読む際に、常にこの二つの「能動性/受動性」が複合的に展開される。この「能動性/受動性」の問題は、フロイトの「子供が叩かれる」で提示された問題以外に、フランスの精神分析家ジャン・ラプラランシュによる読解における、人間の自我と性の形成の問題、そしてサディズム/マゾヒズムの問題として捉えられている。

「子供が叩かれる」は、神経症患者において観察される「子供が叩かれる」空想をめぐる自我に関する考察をした論文である。「子供が叩かれる」空想は、神経症患者の特徴によって三つの段階に分けられる。まずは第一段階において、「お父さんは子供を叩いている」(Freud 1919=1996:82)という空想がある。これは、さまざまな現実的な場面に対応しながら、実際の出来事の想起も意味しており、主に近親相姦的な愛情の表現であるとフロイトは指摘している。第二段階では、空想が「わたしがお父さんに叩かれる」(Freud 1919=1996:83)に転換する。第一段階の空想における近親相姦的な愛情がこの段階の空想によって抑圧される。フロイトは、「禁じられた性器的関係に対する罰であるだけでなく、それに対する退行的な代償でもある」(Freud 1919=1996:89-90)と説明し、主に近親相姦への罪の意識によってこの転換が引き起こされると論じた。第三段階では、「空想する子供は目撃者として登場」(Freud 1919=1996:91)する。罪の意識がこの段階でより一層抽象化され、超自我的な側面が形成される痕跡も窺える。

ラプラランシュは、この「子供が叩かれる」空想の三段階を、「(一) お父さんが私の嫌いな子どもを叩く。(二) お父さんが私を叩く。(三) 子供が叩かれる」(Laplanche 1970=2018:185)と区別し、以下のように人間の欲動の変遷を空想の三段階に対応する図式で論じている。

#### ① 欲動の方向転換の図式 (Laplanche 1970=2018:180)

他への攻撃 - (方向転換) → 自己への攻撃 [依托] - (方向転換) → サディズム  
 ([再帰的] マゾヒズム) ⊥ (反転) → マゾヒズム

#### ② 「子供が叩かれる」図式 (Laplanche 1970=2018:180)

お父さんは私の嫌いな子供を叩く → お父さんは私を叩く - (方向転換) → サディズム  
 ⊥ (反転) → マゾヒズム  
 ⊥ 子供が叩かれる

第一段階の「お父さんは私の嫌いな子供を叩く」は、最初に確認することができる幼児の「他への攻撃」に対応する。この段階において現れた攻撃性は、通常での意味のサディズムではなく、性とは関係ない「非性的」サディズムである (Freud 1919=1996:186)。第二段階の「お父さんは私を叩く」は、第一段階で主体が得た攻撃性に対して罪の意識を感じ、それを抑圧する結果として「お父さんが私を叩く」という無意識的の幻想にまで退行する。この段階において第一段階の攻撃性が患者によって再構成され、ラプラランシュはそれを「[再帰的] マゾヒズム」と位置づけた。「再帰的」というのは、攻撃性の方向転換の「後」から発見される「再び回帰する」という意味がある。

またこの「再帰的」マゾヒズムは、一般的な意味での性的なマゾヒズムから区別され、単純に攻撃性が働く方向性を指す非性的なマゾヒズムである。ただし、以下で詳しく述べるように、この「再帰的」マゾヒズムは「同時に」性的であり受動的であることにも注意しなければならない。このような他（外界）への攻撃性が自分への回帰を可能にし、その方向を転換させるのは「依托」である。

「依托」は本来、「生命にとって不可欠な身体機能」という自己保存の動きに依りかかることを指すが（Laplanche & Bertrand 1967=1977:10）、ラプランシュの議論では、このプロセスによって性的な動きが自己保存の動きから分離する側面が重視されている。この分離というのは、「生命にとって不可欠な身体機能」の対象（他）の喪失により、本来生命維持のための「身体機能」それ自体が自己目的になり性的な意味が見出されるという分離のことである。「子供が叩かれる」空想の第二段階で現れる攻撃性の、他から自己への方向転換を可能にしたのは、この依托による分離があるからだ。すなわち、「お父さんは私の嫌いな子供を叩く」によって示した他（外界）への攻撃性が依托を通して、一方で攻撃性が「非性的に」自己に向くように方向転換させるという「再帰的」側面、他方でこの自己への攻撃性は同時に「自分を性的に興奮させる」（Laplanche 1970=2018:189）性的な側面が生じる、ということである。

第三段階の「子供が叩かれる」に関しては、フロイト自身もラプランシュも、明確な理解を示していない。紙幅の関係もあり深入りすることはしないが、ラプランシュの「三つの項」で区別すると、この段階において、「お父さん」（叩く人）「私」（叩かれる人）といったような人称を伴う能動性と受動性から区別した、「叩く」（行為）それ自体が抽出され、攻撃性そのものが患者の中に一つの幻想として形作られる。

フロイトは「子供が叩かれる」において、少女が少年へ、少年が少女へ同一化する欲望があると指摘した。だが以上検討したように、「子供が叩かれる」幻想の三段階が示したのは、長池が述べたような単に自分を女性化させ「象徴的な父」に愛される欲望を表すものではない（長池 2019:89）。このような異なる性別になる欲望は、あくまで二次的なものである。「お父さんは私を叩く」段階において抑圧された近親相姦的な欲望や、「お父さんは私の嫌いな子供を叩く」段階が示した愛されたい希求の向こうには、依托による生命保存のための攻撃性をいかに自己への攻撃に変換するかがあり、それによって生じてくる非性的（再帰的）な側面と性的な側面が矛盾しながら共存する状態がある。このような議論を経ることで、「子供が叩かれる」幻想を通してショタを解釈する際には、むしろ「ショタがいかに自分を興奮させるか」という点こそ、着目すべきであると指摘できる。

本章の冒頭では「能動的同一化」と「受動的同一化」それぞれに、能動性と受動性があると述べた。「能動的同一化」すなわち「ヘゲモニー的な男性性」に対する能動性と受動性をもし、「お父さんは私の嫌いな子供を叩く」という空想に対応させるなら、「お父さん=ヘゲモニー的な男性性」が「私の嫌いな子供=ショタ」を「叩く=服従させる」という関係になるのだろう。この場合は、能動性は「叩く=服従させる」という形で現れ、受動性はヘゲモニー的な男性性を引き受けた「私の嫌いな子供=ショタ」にある。この意味で、受容者が「ヘゲモニー的な男性性」との駆け引きにおいて、ショタへの愛着だけではなく、ある程度「ヘゲモニー的な男性性」に屈服するショタの姿—屈強なモブキャラに犯されることなど—を見て楽しむという（非性的な）ショタへの攻撃性も存在しているとも言えるだろう。また、攻撃性も第二章の末尾で述べたように、ショタ（作品）に溢れている非意味的な側面—自分以外の子供という他者が意味する謎—を抹消し破壊する動きとして現れている。言い換えると、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」は、「ヘゲモニー的な男性性」に屈することが意味する受動性を引き受け、「ヘゲモニー的な男性性」への否認ではなく、むしろある依存的な関係を見出すことができるということになる。

キャラクターの観点から考えるなら、攻撃性は「ヘゲモニー的な男性性」に屈服するショタの姿—ショタが意味する受動性—を見ることによって表現される。他方で、作品=物質を基準にして考えるなら、攻撃性はショタ作品が表す視線や記号では捉えられない非意味的な側面を否認し、それらを「可愛く弱い」「性関係における受動性」といった「非-ヘゲモニー的な男性性」に一義的に還元させる強制力として働いている。したがって、「能動的同一化」による「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」には、規範性を拒否しながらも規範性に依存するという矛盾があると考えられる。それに対して、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」は「受動的同一化」において、もはや機能しない。この同一化では、ショタを視線や記号、さらにいうと、とりわけそれらによって表現されたキャラクターの能動性と受動性という意味の領域に還元しない。受容者は「受動的同一化」を通して、ただ手前にある線分や色彩などの断片を非意味的な物質=身体として引き受け、自己自身の内部で興奮する対象=ショタを構成する。

「能動的同一化」では、まだ性的ではない。ショタを性的に捉えるためには、「受動的同一化」、つまり「ショタ作品」という表現それ自体に対する能動性と受動性が必要である。それは、幼児が依託を通じて性を発見するのと同様に、本来ショタへの攻撃性が「自己」、すなわち受容者に方向転換することによって、非性的な攻撃性から区別される性的な攻撃性が見出される。言い換えると、ショタ（作品）に感じた性的な興奮や快は、自分に向けられた攻撃性が意味する「自分を性的に興奮させる」ことによって得られたものだ。したがって、意味作用があつて初めて機能する「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」は、「受動的同一化」が示すように、自己の内部で構成された非意味的な部分に興奮させられるという「受動性」によって宙吊りにされる。以上は、ショタに関する「能動的同一化」と「受動的同一化」との関係から析出した、より根源的な受動性の側面である。

## 結論

第一章で述べたように、先行研究では、ショタおよびその受容に関して基本的にショタの受動性への同一化に焦点をあて、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」という機能を重視し論じてきた。しかし第二章の作品分析および第三章の精神分析の検討を通して、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」は「能動的同一化」に基づいた観点である限り、必ずヘゲモニー的な男性性という規範性への拒否と同時に依存するという矛盾した点が生じると指摘した。

そこで本稿は、ショタ作品の再分析により、ショタおよびショタ作品に対する受動的な介入である「受動的同一化」を導入することによって、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」を経由しないもう一つのショタの受容を示唆した。それは、ショタに引き起こされるにもかかわらず、受容者が自己自身の内部で構成した、規範性ともショタとも無関係な「身体」を媒介し、性的な快を獲得する読みである。このように、従来の研究では重視されてこなかった「受動的同一化」を通して、受容者／ショタ／「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」三者が構成した錯綜する力学的な関係をなぞり、そこにあるより根源的な受動性を表す「身体」による読みを見出した。この「身体」は、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」を経由しない、ショタを性的に捉える契機として、もう一つ重要な受容の仕方であると、結論づける。

## 参考文献

- 東浩紀, 2001, 『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』講談社現代新書。
- 伊藤剛, 2007, 『マンガは変わる——“マンガ語り”から“マンガ論”へ』青土社。
- 大塚英志, 1994, 『戦後マンガの表現空間——記号の身体の呪縛』法蔵館。
- 竹内オサム, 1995, 『戦後マンガ50年史』筑摩書房。
- , 1999, 『手塚マンガのキーワード16 (& ブックガイド)』『文藝別冊 [総特集] 手塚治虫』河出書房新社, 56-71。
- 長池一美, 2019, 「「腐男子になる」欲望——東アジアにおける異性愛男性 BL ファン比較研究」ジェームズ・ウェルカー編『BLが開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社, 77-96。
- 永山薫, 2003, 「セクシュアリティの変容」東浩紀編『網状言論 F 改 ポストモダン・オタク・セクシュアリティ』青土社, 39-57。
- , 2006, 『エロマンガ・スタディーズ——「快樂装置」としての漫画入門』イースト・プレス。(再録: 2014, 『増補 エロマンガ・スタディーズ——「快樂装置」としての漫画入門』筑摩書房。)
- 夏目房之介, 1995 「擬音から「音喩」へ」石井慎二編『別冊宝島 EX——マンガの読み方』宝島社, 126-137。
- 堀あきこ, 2009, 『欲望のコード』臨川書店。
- 松村明編, 2008, 「ショタコン」, 『スーパー大辞林 3.0』三省堂。
- メディアックス編, 2020, 『オトコのコ HEAVEN』50, メディアックス。
- 吉本たいまつ, 2014, 『ショタアンソロジーを考える。1994-1999』みるく☆きゅらめる。
- , 2015, 「ショタ・女装少年・男の娘——二次元表現における「男の娘」の変遷」『ユリイカ』47 (13), 210-224。
- 渡辺由美子, 1998, 「ショタ研究」岡田斗司夫編『国際おたく大学——1998年最前線からの研究報告』光文社, 31-55。
- Laplanche, Jean, 1970, *Vie et mort en psychanalyse*, Paris: Flammarion. (十川幸司・堀川聡司・佐藤朋子訳, 2018, 『精神分析における生と死』金剛出版。)
- Laplanche, Jean et Pontalis, Jean-Bertrand, 1967, *Vocabulaire de la psychanalyse*, Paris: PUF. (村上仁監訳, 1977, 『精神分析用

## 彭 「同一化」の行方

語辞典』みすず書房。)

Freud, Sigmund, 1919, Ein Kind wird geschlagen. *Int.Z.Psychoanal.*, 5 (2), 151-72. (中山元訳, 1996, 「子供が叩かれる」竹田青嗣編『自我論集』筑摩書房, 73-112.)

pixiv, 2024, 「シヨタ」, ビクシブ百科事典, (2024年9月3日取得, <https://dic.pixiv.net/a/%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%82%BF>)

## Beyond identification: Mangas About the Passivity of 'Shota'

PERNG Shinwen

### Abstract:

The term "shota" refers to a 'cute-looking boy character' in anime and manga. Previous studies have highlighted the role of 'escaping hegemonic masculinity' in the acceptance of shota characters. However, it is also suggested that the acceptance of shota may occur without necessarily involving the 'escape from hegemonic masculinity'. This paper investigates the intricate and dynamic relationships between the audience, shota, and the concept of 'hegemonic masculinity' through an analysis of shota-themed commercial manga and psychoanalytic theory. Additionally, it delves into the role of 'identification' in the reception of shota. Based on this analysis, 'active identification' is defined as the process of identification that enables an 'escape from hegemonic masculinity', while 'passive identification' refers to the process that facilitates the acceptance of shota through the 'body', which embodies a more profound passivity. The paper concludes that 'passive identification' based on the 'body' constitutes a key mechanism for the acceptance of shota, independent of the framework of 'escaping hegemonic masculinity'.

Keywords: Shota, identification, manga studies, psychoanalysis, passivity

### 「同一化」の行方 ——ショタの受動性をめぐって——

彭 信 文

### 要旨：

ショタとは、二次元表現における「可愛い外見を持つ少年キャラクター」を指す。先行研究においては、ショタの受容が「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」として機能し、表現された受動性への「同一化」を通じて課された社会的規範から逃れる役割に焦点が当てられてきた。しかしながら、ショタの受容には「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」を伴わない形態も存在すると考えられる。そこで本論文では、ショタの商業マンガ作品の分析および精神分析的考察を通じて、受容者／ショタ／規範性の関係性を再検討し、ショタの受容における「同一化」の問題を論じる。以上を踏まえ、「ヘゲモニー的な男性性からの逃避」として機能する「能動的同一化」に対して、本論文では、より根源的な受動性を表す「身体」に基づく「受動的同一化」が、ショタの受容における別の重要な側面として機能することを結論づける。